

**IBM DB2 Information Integrator
OmniFind Edition**



リリース・ノート

バージョン 8.2 フィックスパック 1

**IBM DB2 Information Integrator
OmniFind Edition**



リリース・ノート

バージョン 8.2 フィックスパック 1

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。
<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは
<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM DB2 Information Integrator
OmniFind Edition
Release Notes
Version 8.2 Fix Pack 1

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.3

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2004, 2005. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2005

目次

1	リリース・ノートについて	v
1	Web 上のテクニカル・サポート情報	v
1	DB2 II OmniFind Edition バージョン	
1	8.2.1 のインストール	1
1	DB2 II OmniFind Edition のアンインストール	3
1	このリリースでの新規事項	5
1	新たにサポートされたオペレーティング・システムと	
1	データ・ソース・タイプ	5
1	カスタム・コレクション ID の指定	5
1	パスワード保護された Web サイトのクロール	6
1	Web ページのフレームセットのクロール	9
1	Web 文書内の META タグからのセキュリティ・ト	
1	ークンの構成	9
1	禁止文書へのリンク内のアンカー・テキストの索引	
1	作成	10
1	Web ページ内の索引作成なし (no-index)、および追	
1	跡なし (no-follow) ディレクティブのオーバーライド	10
1	Web クローラーのグローバル・クロール・スペース	
1	の構成	11
1	複数の Lotus Notes サーバーの構成	13
1	「クロールする Notes サーバーの指定」ページ	14
1	VeniceBridge クローラーのパフォーマンスの向上	16
1	Windows ファイル・システムのログイン情報の指定	17
1	「外部名」は「Display name (表示名)」に	17
1	データ・リスナーの構成とモニター	18
1	「システム」ビュー: 「データ・リスナー」ペー	
1	ジ	18
1	「システムのモニター」ビュー: 「データ・リス	
1	ナー」ページ	19
1	「Data listener details (データ・リスナーの詳	
1	細)」ページ	20
1	データ・リスナー・コンポーネントの停止と始動	21
1	コレクション内の文書数の見積もり	21
1	コレクション・ウィザードによるシステム・リソー	
1	スの自動的なチェック	22

1	パーサー・アクティビティのモニター	22
1	「Parser details (パーサーの詳細)」ページ	22
1	HTML メタデータの検索フィールドへのマッピング	25
1	「HTML metadata field mappings (HTML メタデ	
1	ータ・フィールド・マッピング)」ページ	25
1	日本語および中国語の文書の空白文字からの改行文	
1	字の除去	26
1	コレクション・パーサーおよび Stellent セッション	
1	で処理する文書タイプの構成	27
1	コレクション・パーサーの文書タイプの構成	27
1	Stellent セッションの文書タイプの構成	30
1	照会処理の強化	34
1	同じ Web サイトからの結果の縮小表示	34
1	検索結果の拡張強調表示	35
1	検索アプリケーションのタイムアウト・サポート	35

既知の制限、問題、および予備手段 37

DB2 UDB for AIX tar ファイルのアンパック	37
AIX での共用メモリー・セグメント	37
Windows 上でアンインストールしたあと、システム	
を再始動する	38
Linux および AIX の場合の孤立 URLFetcher プロセ	
ス	38
サーバー上の索引の場所	39
ヒープ・サイズの限度	39
ラージ・オブジェクトの入った DB2 UDB 表	39
索引状況が表示されない	39
Linux および AIX の場合のユーザー ID 許可	40
FileNet Content Services の直接の文書アクセスを使	
用可能にする	40
クロール・ニックネーム表の制限	40

特記事項 41

商標	43
----	----

IBM と連絡を取る 45

製品情報	45
------	----

1 リリース・ノートについて

1 リリース・ノートでは、IBM® DB2® Information Integrator OmniFind™ Edition バージョン 8.2.1 (バージョン 8.2 にフィックスパック 1 を適用) に関して、このリリースでの新規事項、既知の制限、問題、予備手段、および資料の更新について説明しています。

1 IBM DB2 Information Integrator OmniFind Edition バージョン 8.2.1 は翻訳されていません。製品のインターフェースおよびメッセージで変更された個所は、英語のままになっています。

1 Web 上のテクニカル・サポート情報

1 DB2 II OmniFind Edition 製品は、最近、WebSphere® Information Integrator
1 OmniFind Edition に名前が変更されました。製品に関連する Web ページでは、
1 WebSphere Information Integrator OmniFind Edition となっていますが、製品のイン
1 ターフェース、資料、およびトラブルシューティング情報 (技術情報) では、まだ
1 DB2 ブランドのままです。

1 テクニカル・サポート情報は次の Web サイトにあります。

1 IBM DB2 Information Integrator OmniFind Edition

1 www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/supportomni.html

1 IBM WebSphere Information Integrator

1 <http://www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html>

1 IBM WebSphere Application Server

1 <http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/was/support/>

1 IBM DB2 Universal Database™ for Linux™、UNIX®、および Windows® バージョン 8 製品

1 www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support

1 DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2.1 のインストール

1 DB2 II OmniFind Edition インストール・ランチパッドを使用して、全製品 (バージ
1 ョン 8.2.1) をインストールすることも、あるいは、既存のインストールに バージ
1 ョン 8.2.1 アップグレードのみをインストールすることもできます。

1 バージョン 8.2.1 アップグレードをインストールする前に、既存のインストールを
1 バックアップしてください。システムのバックアップとリカバリーについての情報
1 は、「エンタープライズ・サーチの管理」を参照してください。インストールの間
1 に、既存のデータ・ディレクトリーへのパスを指定してください。インストール・
1 ランチパッドは、既存のインストール情報を使用してアップグレードをインスト
1 ールします。

1 以前に DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 をインストール済みで、バージ
1 ョン 8.2.1 全製品をインストールする場合は、まず DB2 II OmniFind Edition をアン
1 インストールしなければなりません。既存のインストールの上に全製品をインスト
1 ールすることはできません。また、既存のシステムをバックアップし、バージ
1 ョン 8.2.1 をインストールしたあと、バージョン 8.2 の構成設定をバージョン 8.2.1 シス
1 テムにリストアすることもできません。

1 バージョン 8.2.1 をインストールするには、次のようにします。

1 1. インストール・ランチパッドを開始します。

1 オプション	1 説明
1 Linux	1 root ユーザーとしてログインし、 1 ./install-linux.bin を入力する。
1 AIX	1 root ユーザーとしてログインし、 1 ./install-aix.bin を入力する。
1 Windows	1 管理者権限を持っていないといけない。フ 1 ァイル install-win32.exe をダブルクリックす 1 るか、install-win32.exe を入力する。

1 2. インストール・ランチパッドを開いたあと、「製品のインストール」をクリック
1 します。

1 3. バージョン 8.2.1 アップグレードをインストールするには、次のようにします。

1 a. アップグレードのインストールのウィンドウで、「**Upgrade an existing DB2
1 II OmniFind Edition installation (既存の DB2 II OmniFind Edition インス
1 トールのアップグレード)**」を選択します。このオプションを選択すると、既
1 存のバージョン 8.2 のシステム構成は、バージョン 8.2.1 システムに移行さ
1 れます。

1 b. 既存のデータ・ディレクトリーへのパスを入力します。「次へ」をクリック
1 します。

1 c. 「サマリー」ウィンドウで、設定値を確認します。「次へ」をクリックし
1 て、インストールを開始します。

1 4. バージョン 8.2.1 全製品をインストールするには、次のようにします。

- 1 a. 「**Install a new version of DB2 II OmniFind Edition (DB2 II OmniFind**
1 **Edition の新しいバージョンのインストール)**」を選択します。以前に DB2 II
1 OmniFind Edition バージョン 8.2 をインストール済みであれば、このオプション
1 を選択する前に、必ずそれをアンインストールしてください。
- 1 b. 「エンタープライズ・サーチ インストール・ガイド」の手順に従って、製品
1 をインストールします。

1 DB2 II OmniFind Edition のアンインストール

1 アンインストール・プログラムは、エンタープライズ・サーチ・コンポーネントを
1 除去します。また、すべてのデータ・システム構成を除去することもできます。

1 DB2 II OmniFind Edition をアンインストールする前に、システムをバックアップし
1 ておいてください。

1 マルチサーバー構成の場合は、それぞれのサーバーでアンインストール・プログラ
1 ムを実行してください。DB2 II OmniFind Edition をアンインストールするには、
1 次のようにします。

- 1 1. Linux および AIX の場合、root ユーザーとしてログインします。
- 1 2. インストール・ディレクトリー (ES_INSTALL_ROOT) 中の _uninst ディレク
1 トリーをブラウズするか、またはそこに移動して、アンインストール・プログラ
1 ムを開始します。

1 オプション	1 説明
1 Linux または AIX	1 ./uninstall.bin を入力する。
1 Windows	1 ファイル uninstall.exe をダブルクリック 1 するか、uninstall.exe を入力する。

- 1 3. オプション: すべてのエンタープライズ・サーチ管理者構成情報を除去するに
1 は、「Remove all data and configuration files (すべてのデータと構成ファイルの
1 除去)」チェック・ボックスを選択します。

1 **重要:** このチェック・ボックスを選択すると、システム上のすべてのコレクシ
1 ョンのデータがすべて除去されます。

1 Windows の場合、DB2 II OmniFind Edition を再インストールするには、その前
1 にコンピューターを再始動する必要があります。

このリリースでの新規事項

DB2 II OmniFind Edition の新しいフィーチャーと機能には、検索管理の機能強化、検索の質とパフォーマンスを改善するための拡張、および Microsoft® Windows 2003 のサポートが含まれます。

新たにサポートされたオペレーティング・システムとデータ・ソース・タイプ

DB2 II OmniFind Edition は、32 ビット Windows Server 2003 オペレーティング・システム (Standard Server、Advanced Server、および Datacenter Server) をサポートし、Microsoft SQL Server データベースをクロールできます。

Windows Server 2003 をインストールするには、「エンタープライズ・サーチ インストール・ガイド」にある Windows Server 2000 と同じ手順に従ってください。

SQL Server データベースをクロールするには、エンタープライズ・サーチ管理コンソールを使用して DB2 クローラーを作成し、クロールするデータ・ソースを構成します。

カスタム・コレクション ID の指定

コレクションを作成するとき、システムが作成する内部 ID を使用することも、あるいは、カスタム・コレクション ID を指定することもできます。

カスタム・コレクション ID を指定すると、検索アプリケーションは、エンタープライズ・サーチ・アプリケーション・プログラミング・インターフェースを使用して、この ID で (システムが作成する暗号のような ID ではなく) コレクションを呼び出すことができます。

カスタム・コレクション ID を指定する場合は、コレクションを作成するときに指定する必要があります。あとでコレクションを編集して、この ID を変更することはできません。

使用するコレクション ID のタイプを指定するには、次のようにします。

1. エンタープライズ・サーチ管理コンソールを開始します。セキュリティーが使用可能である場合は、エンタープライズ・サーチ管理者権限を持つユーザーとしてログインします。
2. コレクションを作成するときにウィザードを使用するかどうかによって、「**コレクションの作成**」または「**コレクション・ウィザード**」を選択します。
3. 「**コレクション ID**」フィールドで、次のオプションの 1 つを選択します。

Default collection ID (デフォルト・コレクション ID)

システムがコレクションの内部 ID を作成するようにするには、このオプションを選択します。

Custom collection ID (カスタム・コレクション ID)

自分でコレクションの ID を指定する場合は、このオプションを選択します。指定する値には、英数字と下線文字のみを含めることができます。

パスワード保護された Web サイトのクロール

DB2 II OmniFind Edition Web クローラーは、HTTP 基本認証の使用と、Cookie の情報の保存によって、パスワード保護された Web サイトをクロールできます。

HTTP 基本認証サポート

エンタープライズ・サーチ管理者は、クロールの開始前に、クロールするパスワード保護された Web サイトを識別し、必要な証明書を `httpauth.ini` という構成ファイルに指定することができます。

`httpauth.ini` ファイルは、以下のフォーマット規則に従わなければなりません。

- `httpauth.ini` ファイルの内容はテキストで、空白文字以外の非印字文字は含まれません。データ・エントリーは、改行で区切られます。
- ファイルには、許可エントリー、コメント、ブランク行を任意の順序で含まれます。
- 最初の非空白文字が # である行は、コメントです。
- コメントは、コメントでないテキストを含む行には組み込めません。
- それぞれの許可エントリーは、以下の情報をこの順序で 1 行に含まなければなりません。
 - ターゲット URL (許可が必要なサーバー・ファイル・システムのルート)
 - サーバーに意味のあるレルム名
 - ログイン用ユーザー名
 - ログイン用パスワード
 - 再認証 URL
 - セミコロンで区切ったセキュリティー・トークンのリスト。空でも可能ですが、5 番目のフィールドの後にコンマ区切り文字を付けて、フィールドを存在させる必要があります。
- 行内のフィールドは、コンマで区切ります。コンマ前後の空白文字は許されません。
- 各データ・エントリーのパスワードは、DB2 II OmniFind Edition のこの他の部分で使用されているのと同じ暗号化方式で暗号化されます。
- URL の許可は、サーバーのファイル・システムで指定 URL の下にあるすべての URL に対して有効と見なされます。

`httpauth.ini` ファイルの変更には、`httpauthedit` というコマンド行ユーティリティーを使用できます。このユーティリティーでは、エントリーの作成または編集時にパスワードを平文 (暗号化されない) で入力できますが、ユーティリティーが、パスワードをディスクに書き込む前に暗号化します。パスワードを変更するには、エントリーを削除して再び追加する必要があります。

1 httpauthedit ユーティリティーを開始するには、以下のコマンドを 1 行で入力しま
1 す。

```
1 java -classpath ES_INSTALL_ROOT/lib/URLFetcher.jar:esinstall/lib/es.oss.jar  
1 com.ibm.es.wc.uf.HTTPAuthEdit configdir
```

1 ES_INSTALL_ROOT は、DB2 II OmniFind Edition のインストール・ディレクトリー
1 で、configdir は、httpauth.ini ファイルを作成 (または変更) するクローラー・イン
1 スタンスのマスター構成ディレクトリーです。

1 マスター構成ディレクトリーは ES_NODE_ROOT/master_config/CR_INST_DIR にあり
1 ます。ここで、ES_NODE_ROOT は、ES_CFG ファイル内の NodeDirectory の値
1 で、CR_INST_DIR は、新しい Web クローラー・インスタンス用に作成されたデ
1 レクトリー (管理ソフトウェアで任意の名前を指定) です。必ず、正しいインス
1 タンス構成で稼働させてください。クローラーの次回始動時まで、変更はクローラー
1 に影響しません。

1 httpauthedit ユーティリティーは以下のコマンドを受諾します。

1 表 1. HTTPAUTHEDIT ユーティリティーが受諾するコマンド

コマンド	説明
?	ヘルプ: コマンド・セットについて説明します。
b	ブラウズ (browse): ファイルの内容を表示します。
a	追加 (add): 新しい許可エントリーをファイルに追加します。このコマンドには、コンマ区切りで 1 行に指定された 5 つまたは 6 つの引数が必要です。 例: http://www.ibm.com/solutions/, solutions, wwwsearch, foobar, xyz123, http://www.ibm.com/solutions/, group1;group2;admin3 • ターゲット URL: http://www.ibm.com/solutions/ • レルム名: solutions • ユーザー名: wwwsearch, foobar • パスワード: xyz123 • 再認証 URL: http://www.ibm.com/solutions/ • オプション: セキュリティー・トークン: group1;group2;admin3
d	削除 (delete): 許可エントリーをファイルから除去します。このコマンドに必要な引数は 1 つで、それはファイルから除去する認証エントリーのターゲット URL (http://www.ibm.com/solutions/ など) です。
q	終了 (quit): プログラムを終了します。

1 再認証 URL は、ターゲット URL と同じにすることができます。

- 1 • 再認証 URL は、許可のない要求があった場合に、クライアントが許可を依頼し
1 たいレルムについて、HTTP 基本ユーザー確認を用いてサーバーから 401 応答
1 を起動する URL でなければなりません。
- 1 • 再認証 URL は、リダイレクトなしでこの応答を起動しなければなりません (再
1 認証 URL は真の宛先ページである必要があり、別のページにクライアントをリ
1 ダイレクトする 301、302 などのページではあってはなりません)。この再認証
1 URL は、許可するレルムのルート URL と同じでないことがあります。再認証
1 URL がルート URL と同じであるかどうかは、Web サイトの内部ロジックによ
1 って決まります。詳細は Web サイト管理者が提供できます。

1 前後の空白文字は、フィールド値から除去されます。無効な入力を行うと、
1 httpauthedit がエラー・メッセージを示します。

1 quit コマンドを入力すると、変更が保管されます。明示的な保管コマンドはありま
1 せん。変更をキャンセルするには、quit を使用せずに終了することで、プログラム
1 を強制終了できます。

1 Cookie

1 Web クローラーは、サーバーから受け取った Cookie を保持し、クローラー・イン
1 スタンスが存続する間、それを使用します。クローラーは、シャットダウン時に、
1 期限切れでないすべての Cookie をディスクに保管し、次のクローラー・セッション
1 の開始時にそれを再ロードします。Cookie ファイルの名前は cookies.ini で、クロー
1 ラー・データ・ディレクトリーにあります。

1 クローラーにおける Cookie 処理は HTTP 認証 (httpauth.ini ファイル) に依存しま
1 せんが、Web サーバーがコンテンツ保護に Cookie を使用している場合、手動で提
1 供された Cookie でも、認証も必要な場合があります。サイトのクローリングに何が必
1 要かに関する情報は、Web サイト管理者が提供できます。

1 エンタープライズ・サーチ管理者は、クローラーが検出した Cookie に加えて
1 Cookie を追加することができます。これには、テキスト・エディターを使用して
1 cookies.ini ファイルにそれを追加します。このファイルは、クローラーによってシ
1 ャットダウンのたびに書き換えられるため、手動で入力した Cookie を別のファイ
1 ルに保持し、クローリングを開始する前に必要に応じてそれを追加してください。(ク
1 ローラーは期限切れでない Cookie を破棄しませんが、何らかの問題によって
1 Cookie コレクション全体の書き込みが阻害された場合に、手動で指定した Cookie
1 を失いたくありません。)

1 Web クローラーに対して Cookie を指定するには、cookies.ini ファイルを編集しま
1 す。cookies.ini ファイルでは、それぞれの行が 1 つのエントリーになります。ブ
1 ランク行とコメントは許されますが、それらは保持されません。各エントリーのフ
1 ォーマットは次のとおりです。各エントリーは、1 行になければなりません。

```
1 Cookie(53,40)ASPSESSIONIDQSQACSD=SLNSIDFNLSIDNFLSIDNFLSNL;path=/  
1 https://www.ibm.com:443/help/solutions/
```

1 Cookie は必須のキーワードで、エントリーの開始を示します。数値の 53 は、
1 Cookie の名前と値の対と、Cookie と共に送信されるその他の内容 (パス、セキュア
1 設定など) の文字の長さです。数値の 40 は、検証用の関連付けられた URL の長
1 さです。

1 ASPSESSION. . . で、これらの 53 文字は、起点サーバーに送信される Cookie の
1 内容です。このストリングの後には、コンマ (,) 区切り文字を付けます。

1 URL https://www.ibm.com:443/help/solutions/ は、例えば ドメイン名の提供に
1 よる、Cookie の検証に使用されます。手動で追加した Cookie については、Cookie
1 に関するセキュリティーおよびプライバシーの制限を満たす検証 URL を含める必
1 要があります。

Web ページのフレームセットのクロール

Web クローラーは、HTML フレームで作成された Web ページをクロールできるようになりました。

DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、Web クローラーは、フレームセットを解析したり、フレームからリンクを別の HTML ページに抜き出したりできませんでした。

Web 文書内の META タグからのセキュリティ・トークンの構成

Web クローラーの新しいセキュリティ・オプションによって、構成ファイル内に META タグの名前が指定できるようになりました。これらのタグの内容は、そのタグが検出された文書へのアクセスを制御するためのセキュリティ・トークンとして使用されます。

DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、セキュリティ・トークンはグローバルに定義され、Web クローラーで文書レベルのセキュリティが使用可能であるかどうかによって、すべての文書に適用されるか、まったく適用されないかのどちらかでした。

バージョン 8.2.1 では、META タグをセキュリティ・トークンとして指定することにより、文書へのアクセスを制御できるようになりました。META タグ・ベースのセキュリティを使用するには、Web クローラーの文書レベルのセキュリティを使用可能にし、構成ファイルを編集して META タグ名を指定する必要があります (管理コンソールでは META タグ名は指定できません)。

セキュリティ・トークンとして使用する META タグを指定するには、次のようにします。

1. クローラー・サーバーに、エンタープライズ・サーチ管理者としてログインします (このユーザー ID とパスワードは、DB2 II OmniFind Edition のインストールの間に構成されています)。
2. テキスト・エディターを使用して、master_config ディレクトリー・ツリー内の crawl.properties ファイルを編集します。
3. 必要な場合、パラメーター security_meta_tags を挿入します。
(security_meta_tags パラメーターがすでに存在する場合、デフォルト値は nil です。)
4. META タグ名をコンマで区切ったリストとして指定します。例えば、次のとおりです。

```
security_meta_tags=security,acl,access
```

タグ名の規則:

- 構成ファイルから読み取られたタグ名は小文字に変換されます。
- クロールされた文書内のタグ名は、構成ファイル内の名前と比較される前に、小文字に変換されます。
- 名前リストの中の区切り文字はコンマのみです (空白文字で名前を区切ることはできません)。

- 名前に空白が含まれている場合、その空白は保持されます。名前の前後の空白は除去されます。

5. ファイルを保管して終了します。

`security_meta_tags` パラメーターのタグ名が構成されると、ダウンロードされた各 HTML ページの処理の間に、文書の META タグは `security_meta_tags` リストと照合されます。

文書へのアクセスを制御するためのセキュリティー・トークンの使用についての完全な情報は、「エンタープライズ・サーチの管理」の「文書レベルのセキュリティー」のトピックを参照してください。

禁止文書へのリンク内のアンカー・テキストの索引作成

文書に、Web クローラーがクロールできない文書へのリンクが含まれている場合、それらのリンクのアンカー・テキストを索引の中に保存するかどうかを指定できます。

`robots.txt` ファイルまたはメタタグ仕様の中の設定によって、Web サイト上の特定の文書を Web クローラーがアクセスできないようにすることができます。Web クローラーがクロールできる文書に、クロールが禁止された文書へのリンクが含まれている場合、「Web クローラーの拡張プロパティー」ページで、これらの文書のアンカー・テキストをどのように取り扱うかを指定できます。

1. クロールが禁止されている文書へのリンクのアンカー・テキストを索引の中に入れたい場合は、「**Index the anchor text in links to forbidden documents (禁止文書に関連するアンカー・テキストに索引をつける)**」チェック・ボックスを選択します。(アンカー・テキストとは、Web 文書の中で `<A>` と `` タグで囲まれた説明テキストのことです。) このチェック・ボックスを選択すると、禁止されているページが、そのページをポイントするリンクのアンカー・テキスト内のテキストの検索によって検出されます。
2. (クロールが禁止されている文書を除外するのに合わせて) クロールが禁止されている文書へのリンクのアンカー・テキストを索引から除きたい場合は、「**Index the anchor text for links to forbidden documents (禁止文書に関連するアンカー・テキストに索引をつける)**」チェック・ボックスのチェックを外します。

Web クローラーを作成するときに、あるいは、既存の Web クローラーのクロール・スペースを編集することによって、Web クローラーの拡張プロパティーを指定できます。

Web ページ内の索引作成なし (no-index)、および追跡なし (no-follow) ディレクティブのオーバーライド

構成ファイルに規則を指定して、Web クローラーが、no-follow (追跡なし) または no-index (索引作成なし) ディレクティブを含んだページへのリンクを追跡するか、または索引を作成するかを制御できます。エンタープライズ・サーチ管理コンソールには、この機能に対するサポートはありません。

Web ページによっては no-index または no-follow ディレクティブを付けて設計されているものもあります。これは、ロボット (例えば Web クローラー) に、それら

1 のページのコンテンツを索引に入れられないこと、それらのページの中のリンクを追跡
1 しないこと、またはその両方の動作を行わないことを指示します。

1 DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、これらの制限によって Web サイト
1 の管理者またはコンテンツ作成者は制約を受けます。しかし、これらの設定を管理
1 することで、クロールの質を高めることができます。例えば、数千ものリンクが含ま
1 1 れ、それ以外に役に立つコンテンツが入っていないディレクトリー・ページの集
1 1 合があります。それらのページはクロールされるべきです。また、それらのリンク
1 1 は追跡されるべきですが、ページそのものの索引は作成されるべきではありません
1 1 。

1 また、クローラー管理者は下の階層までクロールしたくはないけれども、目的のリ
1 1 ーフ・ページにリンクが含まれており、そのページには追跡なし (no-follow) ディレ
1 1 クティブが含まれていないという場合もあります。このようなページの中には、自
1 1 動生成されて所有者がないページもあるため、そのページに必要なディレクティブ
1 1 を挿入するために必要なコンテンツ所有者を取得することができる場合もあり、で
1 1 きない場合もあります。

1 バージョン 8.2.1 クローラーは、followindex.rules と呼ばれる新規の構成ファイル
1 を構成ディレクトリーの中で探します。このファイルは、いくつもの追跡 (follow) と
1 索引作成 (index) の規則を含むことができます。

```
1 forbid follow URLprefix  
1 allow follow URLprefix  
1 forbid index URLprefix  
1 allow index URLprefix
```

1 追跡 (follow) と索引作成 (index) の規則に、IP アドレスと DNS ホスト名は指定で
1 きません。URL 接頭部 (ワイルドカードを含む) のみ指定できます。順序は意味を
1 1 持ち、クロール規則を指定したとおりの順序になります。追跡または索引作成を明
1 1 示的に許可または禁止する規則が定義されると、これはターゲット文書内の設定も
1 1 含めて、他の設定をオーバーライドします。

1 Web クローラーのグローバル・クロール・スペースの構成

1 構成ファイルの中に、Web クローラーのグローバル・クロール・スペースを作成す
1 1 るための規則と、索引からの URL の除去を細かく制御するための規則を指定でき
1 1 ます。 エンタープライズ・サーチ管理コンソールには、この機能に対するサポート
1 1 はありません。

1 各 Web クローラーは、クロールされる URL、またはクロールされない URL を定
1 1 義するクロール・スペースと共に構成されます。クロール・スペースの中にあるデ
1 1 ィスカバーされた URL は、後のクロールのために (データベース内に) 保存されま
1 1 ます。クロール・スペースにないものは、廃棄されます。クローラーが開始したとき
1 1 にデータベースが空であれば、クローラーが実行されている限り、クロール・スペ
1 1 ース定義とデータベースは整合しています。

1 クローラーはときどき停止され、クロール・スペースは (ページを禁止する新しい
1 1 規則の追加によって) 削減されます。クローラーが再始動されたとき、クロール・
1 1 スペース定義とデータベースは整合しなくなります。というのは、データベースに
1 1 は URL (クロールされたものも、されていないものもある) が含まれますが、新し
1 1 い、小さくなったクロール・スペースにはそれらは含まれないからです。 DB2 II

1 OmniFind Edition バージョン 8.2 では、Web クローラーは、これらの URL の
1 HTTP 戻りコードを 760 (クロール・スペース排除) に変更し、索引から新たに除外
1 されたページを除去する命令を書き込むことによって、整合性を回復します。この
1 ようにするのは、それがコレクション内の唯一の Web クローラーであることと、
1 そのクロール・スペースが、索引内に存在できるすべての Web 文書を識別するこ
1 とを前提としているためです。

1 クローラーが大きなクロール・スペースでしばらく動作したあと、管理者がクロー
1 ル・スペースを 2 つ以上のクローラーの間で分割することを決める場合もあります
1 (おそらくは、ある部分が残りの部分よりも頻繁にクロールされることが確実なた
1 め)。新しいクローラーが作成され、それぞれが、それ自体の独立したデータベー
1 表 (最初は空) と、元のクロール・スペースの別々の部分を持ちます。そして、元
1 のクローラーのクロール・スペースは、新しいクローラーによってクロールされ
1 る部分を除去したあとに残った部分へと削減されます。

1 元のクローラーがバージョン 8.2 クローラーの場合、上述の方法でそのデータベー
1 スの整合性を回復します。しかし、これは管理者が望んでいるものではありません。
1 なぜなら、移動された URL が索引から除去されないからです。それらは、単
1 に他のクローラーによってクロールされているだけです。

1 DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2.1 では、第 2 の、より高いレベルのクロ
1 ール・スペースを提供します。そのクロール・スペースは、現在のクローラーによ
1 ってクロールされないが、削除もされない URL に相当します。(どちらかのス
1 ペースに存在しない URL は、これまで同様、ディスカバリーの間リジェクトされ続
1 け、再スキャンが行われたときに索引から除去されます。)

1 第 2 のグローバル・クロール・スペースは、クローラーの構成ディレクトリーにあ
1 る `global.rules` というファイルの内容によって定義されます。そのファイルが存在す
1 れば、クローラーの初期化の間に読み取られます。`global.rules` ファイルがなけれ
1 ば、クローラーは、単一レベルのクロール・スペース (バージョン 8.2 でのように)
1 で動作します。グローバル・スペースが定義されていれば、クローラーは、従来ど
1 おり、URL の出し入れを指図します。しかし、URL がどちらかのスペースになけ
1 れば、索引から URL を除去するための命令を送信するのみです。

1 `global.rules` ファイルは、ローカルの `crawl.rules` ファイルと同じ構文ですが、ドメ
1 イン・ネームの規則のみ意味があります。(これによって、IP アドレスまたは URL
1 接頭部パターンではなく、DNS ホスト名を使用することによってのみ、クローラー
1 の間でのクロール・スペースの分割が可能になります。)

1 `global.rules` ファイルがあれば、グローバル・クロール・スペース機能が使用可能に
1 なります (存在しなければ、使用可能にはなりません)。URL 接頭部または IP ア
1 ドレス規則によって (`crawl.rules` ファイルで定義されたように) ローカル・クロー
1 ル・スペースから除外された URL は、グローバル・クロール・スペースには影響
1 されずに、除外されます。グローバル・クロール・スペースは、ローカル・ドメ
1 イン規則によって 1 つのクローラーのクロール・スペースから除外された URL が索
1 引から除去されるのを防ぐためのみ使用できます。

1 次に規則がどのように機能するかを示します。

- 1 1. クローラーのデータベースからの URL がローカルの接頭部規則またはアドレス
1 規則によって除外されると、それは、戻りコード 760 を割り当てられ、索引か

1 ら除去されます。これでそのクロール・スペースの処理は終了です。その URL
1 は、再度クロールされることはありません。

- 1 2. ステップ 1 のあと: クローラーのデータベースからの URL がローカル・ドメイ
1 ン規則によって除外され、グローバル・クロール・スペースもなければ、それ
1 は、戻りコード 760 を割り当てられ、索引から除去されます。これでそのクロー
1 ール・スペースの処理は終了です。その URL は、再度クロールされることはあ
1 りません。
- 1 3. ステップ 1 のあと: クローラーのデータベースからの URL がローカル・ドメイ
1 ン規則によって除外されても、グローバル・クロール・スペースの規則によって
1 明示的に許可される場合は、それは、戻りコード 761 を割り当てられます。ク
1 ローラーは、それを再度クロールしませんが、索引から除去されません (それ
1 は、別のクローラーのローカル・クロール・スペースに存在すると想定されま
1 す)。
- 1 4. ステップ 1 のあと: クローラーのデータベースからの URL がローカル・ドメイ
1 ン規則によって除外され、グローバル・クロール・スペースの規則によって明示
1 的に許可されない場合は、それは、戻りコード 760 を割り当てられ、索引から
1 除去されます。これでそのクロール・スペースの処理は終了です。

1 これは重要なポイントです。グローバル・クロール・スペースは、すでにローカ
1 ル・クロール・スペースによって除外された URL が削除されることの回避のみ
1 を意識するため、グローバル・クロール・スペースからのデフォルトの結果は、
1 候補の URL に適用される規則がなければ、禁止です。これは、ローカル・クロー
1 ール・スペースのデフォルトと正反対です。

1 global.rules ファイルは、グローバル・クロール・スペースを共用するすべてのクロー
1 ラーの master_config ディレクトリーに存在しなければなりません。また、グロー
1 バル・ファイルのすべてのコピーと個々のローカル crawl.rules ファイルは相互に一
1 貫性があるように、慎重に編集する必要があることに注意してください。

1 複数の Lotus Notes サーバーの構成

1 複数の Lotus Notes[®] サーバーからのデータベースをクロールする場合、それらのデー
1 タベースをクロールするための追加のクローラーを構成することなしに、同じク
1 ロール・スペースにそれらのデータベースを追加できます。DB2 II OmniFind
1 Edition バージョン 8.2 では、それぞれの Notes クローラーにできることは、単一
1 の Lotus Notes サーバーのクロールに限られていました。

1 1 つの Lotus Notes サーバー上のデータベースをクロールするために Notes クロー
1 ラーを構成したあと、次のようにして、他の Lotus Notes サーバーからのデータベ
1 ースを同じクロール・スペースに追加します。

- 1 1. 「クロール」ページで、構成する Notes クローラーを選択し、「クロール・ス
1 ペース」アイコンをクリックします。
- 1 2. 「Notes クロール・スペース」ページで、「データベースの追加」をクリックし
1 ます。
- 1 3. 次のウィンドウ (14 ページの『「クロールする Notes サーバーの指定」ペー
1 ジ』) を使用して、クロールする Lotus Notes サーバーについての情報を指定し
1 ます。

クローラー・ウィザードが表示するこのあとのページについての説明が必要であれば、「ヘルプ」をクリックします。

ヒント: クローラーが Lotus Notes サーバーにアクセスするために使用するパスワードを変更するには、「Notes クロール・スペース」ページでサーバーを選択して、「サーバーの編集」をクリックします。(Notes クローラーが単一の Lotus Notes サーバーのクロールに限られていたときには、この操作は、「Notes クロール・スペース」ページの上部で行いました。)

「クロールする Notes サーバーの指定」ページ

「クロールする Notes サーバーの指定」ページを使用して、既存のクロール・スペースに構成する Lotus Notes サーバーを識別します。クロール・スペースにサーバーを追加する場合、クローラーがそのサーバー上のデータベースにアクセスするための情報を指定します。

Notes クローラーがクロールするための Notes® 環境のセットアップについては、「エンタープライズ・サーチの管理」を参照してください。

重要: 「次へ」をクリックすると、指定した Notes サーバーにアクセスできるかどうかをシステムが検証します。サーバーにアクセスできない場合には、エラー・メッセージが表示されます。サーバー名とプロトコル情報を確認して訂正し、もう一度「次へ」をクリックしてください。

フィールドおよびコントロール

Existing server (既存サーバー)

クロール・スペースにすでに存在する Lotus Notes サーバーからデータベースを追加することを指定します。

このオプションを選択する場合は、追加するデータベースのある Lotus Notes サーバーを選択します。

New server (新規サーバー)

新しい Lotus Notes サーバーに関する情報をクロール・スペースに追加し、クロールするそのサーバーからデータベースを選択することを指定します。

このオプションを選択する場合は、Notes クローラーがサーバー上のデータベースにアクセスするためのオプションを指定します。

Lotus Notes サーバー名

このクローラーでクロールする Notes データベース (.nsf ファイル) をホストする Domino® サーバーの完全修飾ホスト名 (server1.ibm.com など) を入力します。

NRPC プロトコルを使用する Notes サーバーのデフォルト・ポートは 1352 です。DIIOIP プロトコルを使用する Notes サーバーのデフォルト・ポートは 80 です。サーバーがデフォルト・ポートで listen しない場合、ポート番号 (例えば、server1.ibm.com:1353 または server1.ibm.com:81) を指定します。

Protocol (プロトコル)

サーバーが使用する通信プロトコルに関する情報を指定します。

Notes リモート・プロシージャー・コール (NRPC)

Domino サーバーが Notes リモート・プロシージャー・コール・プロトコル (NRPC) を使用してサーバーと Web ブラウザーの間で情報を交換する場合に、このオプションを選択します。

重要: このコレクションに対して、NRPC プロトコルを使用する Notes クローラーを以前に構成している場合には、この Notes クローラーに関する情報を構成する前にそれを停止してください。NRPC を使用するエンタープライズ・サーチ・ディスカバリー・プロセスと、NRPC を使用するクローラー・プロセスは、同時に実行できません。(ディスカバリー・プロセスが、クローラーできるソースの情報をクローラーに提供します。)

NRPC オプションを選択する場合は、以下の情報を指定します。

Lotus Notes ユーザー ID ファイル

このサーバー上のデータベースへのアクセス権限を持つ Notes ユーザー ID ファイルの絶対パスを入力します。例えば、UNIX マシンで /home/username/username.id などを入力します。

Notes ユーザーごとに、ユーザーを一意的に識別する ID ファイルがあります。ここで指定する ID ファイルのコピーが、クローラー・マシンに存在することを確認してください。エンタープライズ・サーチ管理者 ID には、Notes ユーザー ID ファイルとそのファイルの保管ディレクトリーに対する読み取りアクセス権限が必要です。(エンタープライズ・サーチ管理者のユーザー ID は、DB2 II OmniFind Edition のインストール中に指定されます。)

パスワード

指定した Notes ユーザー ID ファイルのパスワードを入力します。

Domino Internet Inter-ORB Protocol (DIIOP)

Domino サーバーが Domino Internet inter-ORB Protocol (DIIOP) を使用してサーバーと Web ブラウザーの間で情報を交換する場合に、このオプションを選択します。このプロトコルを使用するには、Domino サーバーで HTTP および DIIOP タスクを使用可能にする必要があります。

このオプションを選択する場合は、以下の情報を指定します。

Lotus Notes ユーザー ID

このサーバー上のデータベースへのアクセス権限を持つ Notes ユーザー ID (user1/Hometown/IBM など) を入力します。

パスワード

Domino Directory でこのユーザー ID に対して指定されている Notes インターネット・パスワードを入力します。(Notes サーバーに対して DIIOp が構成されるときに、その 1 つのステップとして、サーバーへのアクセスを許可されたユーザーのインターネット・パスワードを作成します。)

VeniceBridge クローラーのパフォーマンスの向上

Ventica VeniceBridge は、DB2 Information Integrator Content Edition (DB2 II Content Edition) と呼ばれるようになった IBM 製品です。DB2 II OmniFind Edition 製品のインターフェースや資料では、まだ VeniceBridge となっており、このリリース・ノートでも VeniceBridge という呼び方を使ってユーザー・インターフェースの機能拡張について説明します。

再クロールのパフォーマンスの向上のために個々の VeniceBridge 項目クラスの規則を構成するとき、データ・マップを選択できるようになりました。データ・マップは、作成日、改訂日、ソート・キー、およびコンテンツ・サイズといった、項目クラスについての VeniceBridge クローラー情報を提供する DB2 II Content Edition の構成要素です。クローラーの構成の中で、データ・マップと項目クラスを関連付けることによって、その項目クラスの中のコンテンツをクローラーが迅速に再クロールできるようになります。

Documentum および FileNet Content Services の場合、VeniceBridge クローラーがデフォルトのデータ・マップを持っているため、データ・マップを指定せずに、この機能を利用できます。

重要:

これらのパフォーマンスの強化機能を利用するには、DB2 II Content Edition Fix Pack 1 を実行している必要があります。

既存の VeniceBridge クロール・スペースの中でデータ・マップを項目クラスに関連付けるには、次のようにします。

1. VeniceBridge クローラーが属するコレクションを編集します。
2. 「クロール」ページをクリックします。
3. VeniceBridge クローラー名を見つけて、「クロール・スペース」ボタンをクリックします。
4. 「VeniceBridge クロール・スペース」ページで、構成したい項目クラスを見つけて、「編集」をクリックします。
5. 「VeniceBridge 項目クラスに対する規則の構成」ページの「データ・マップ」フィールドで、この項目クラスで使用するデータ・マップの名前を選択します。
6. 「OK」をクリックします。

VeniceBridge クローラーを作成するか、既存のクロール・スペースに項目クラスを追加するのであれば、「VeniceBridge 項目クラスに対する規則の構成」ページで他のオプションを指定するときに、データ・マップ名を選択します。

Windows ファイル・システムのログイン情報の指定

Windows サブディレクトリーのクロール規則を構成するときに、クローラーがそのサブディレクトリー内のデータをアクセスできるようにするためのユーザー ID とパスワードを指定できます。

既存の Windows ファイル・システムのクロール・スペース内のサブディレクトリーのログイン証明書を構成するには、次のようにします。

1. Windows ファイル・システムのクローラーが属するコレクションを編集します。
2. 「クロール」ページをクリックします。
3. Windows ファイル・システムのクローラー名を見つけて、「クロール・スペース」ボタンをクリックします。
4. 「Windows クロール・スペース」ページで、構成したいサブディレクトリーを見つけて、「編集」をクリックします。
5. 「Windows サブディレクトリーに対する規則の構成」ページの「ユーザー ID」および「パスワード」フィールドに、このサブディレクトリーの正しいユーザー ID とパスワードを入力します。
6. 「OK」をクリックします。

Windows ファイル・システムのクローラーを作成するか、既存のクロール・スペースにサブディレクトリーを追加するのであれば、「Windows サブディレクトリーに対する規則の構成」ページで他のオプションを指定するときに、ログイン証明書を指定します。

「外部名」は「Display name (表示名)」に

エンタープライズ・サーチ管理コンソールで、クローラー構成ウィザードの中の「外部名」というラベルは、このフィールドに指定される値が、表示のみを目的としていることがよく分かるように、「Display name (表示名)」に変更されました。

表示名を割り当てるときに、オブジェクトの内部名は変更しないでください。例えば、lastUpdateDateTime という名前のデータベース・フィールドには、より分かりやすい Last updated という表示名を割り当てることができます。

分かりやすい表示名にすることで、ユーザーが検索したいフィールドを一層容易に認識できます。さらに、それによってユーザーは 1 つのフィールド (例えば Author) を検索できますし、それぞれのデータ・ソースの中の別々の内部フィールド名 (例えば Author、Creator、Producer など) を持つ文書を検索することも可能になります。

1 データ・リスナーの構成とモニター

1 エンタープライズ・サーチ管理コンソールを使用して、カスタム・データ・リスナ
1 ・アプリケーションに対するサポートを構成できます。

1 DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、アプリケーションがエンタープラ
1 イズ・サーチ・コレクションを更新できるようにするためには、その前に、いくつ
1 かのファイルを手動で編集する必要があります。次の情報は、「エンタープライ
1 ズ・サーチの管理」の中の「外部クローラーのサポートの構成」にある説明と置き
1 換えられるものです。

1 データ・リスナー・アプリケーションは、コレクションにデータを追加したり、コ
1 レクションから URI を除去したり、あるいは Web クローラーが URL にアクセ
1 ス、または再アクセスするように指示することができます。ユーザー (クライアン
1 ト) がデータ・リスナー・コンポーネントに接続するときに、クライアント ID、パ
1 スワード、および更新されるコレクションの ID を渡す必要があります。データ・
1 リスナー・コンポーネントはクライアント ID とパスワードを認証し、有効であれ
1 ば、アプリケーションに、指定されたコレクションの更新を許可します。

1 データ・リスナー・アプリケーションのサポートを構成するには、管理コンソー
1 ル・ツールバーで「システム」オプションを選択します。次のウィンドウを使用し
1 て、データ・リスナー・アプリケーションに関する情報を指定し、データ・リスナ
1 ー・アクティビティをモニターします。

- 1 • 『「システム」ビュー: 「データ・リスナー」ページ』
- 1 • 19 ページの『「システムのモニター」ビュー: 「データ・リスナー」ページ』
- 1 • 20 ページの『「Data listener details (データ・リスナーの詳細)」ページ』

1 「システム」ビュー: 「データ・リスナー」ページ

1 「システム」ビューの「データ・リスナー」ページを使用して、カスタム・デー
1 タ・リスナー・アプリケーションがコレクションを更新するための情報を指定しま
1 す。

1 データ・リスナー・アプリケーションでは、DB2 Information Integrator OmniFind
1 Edition で提供されるデフォルトのクローラーでクロールできないデータ・ソース・
1 タイプのクロールが可能になります。アプリケーションは、コレクションにデータ
1 を追加したり、コレクションからデータを除去したり、URL のアクセスや再アク
1 セスを Web クローラーに指示したりできます。

1 フィールドおよびコントロール

1 スレッド数

1 データ・リスナー・アプリケーションからの要求を処理するためにデータ・
1 リスナー・コンポーネントが作成できる作業スレッドの最大数を入力しま
1 す。デフォルト値は 6 です。

1 Data listener port (データ・リスナー・ポート)

1 データ・リスナー・コンポーネントのポート番号を入力します。デフォルト
1 値は 6668 です。

1 **重要:** ポート番号を変更した場合、変更を有効にするには、データ・リスナー・コンポーネントの再始動が必要です。

1 **Add Data Listener Client ID (データ・リスナー・クライアント ID の追加)**

1 新しいデータ・リスナー・アプリケーションの情報を指定するために、データ・リスナー・クライアント ID のリストに空白行を追加します。

1 **Data Listener client ID (データ・リスナー・クライアント ID)**

1 エンタープライズ・サーチ・コレクションへのアクセスを許可するデータ・リスナー・アプリケーションのクライアント ID を入力します。それぞれの ID は、エンタープライズ・サーチ・システム内で固有でなければなりません。

1 **パスワード**

1 データ・リスナー・アプリケーションのパスワードを入力します。エンタープライズ・サーチ・コレクションにアクセスするには、指定した証明書 (ID およびパスワード) をデータ・リスナー・アプリケーションが使用しなければなりません。

1 **コレクション名**

1 このデータ・リスナー・アプリケーションで更新するコレクションを選択します。各データ・リスナー・アプリケーションは、1 つのコレクション内のコンテンツのみを更新できます。

1 **除去**

1 選択したデータ・リスナー・アプリケーションをエンタープライズ・サーチ・システムから除去します。このアプリケーションは、エンタープライズ・サーチ・コレクションに対するデータの追加や除去に使用されなくなります。

1 **「システムのモニター」ビュー: 「データ・リスナー」ページ**

1 システムのモニター中に「データ・リスナー」ページを使用して、データ・リスナー・コンポーネントおよびデータ・リスナー・アプリケーション・アクティビティの詳細を表示します。

1 **フィールドおよびコントロール**

1 **リフレッシュ**

1 このページの情報をリフレッシュします。状況メッセージに、この情報が最後にいつリフレッシュされたかが示されます。

1 **名前** コンポーネント名 (データ・リスナー) を示します。

1 **詳細**

1 データ・リスナー・アクティビティの詳細情報を示します。(データ・リスナーが停止していると、詳細は得られません。)

1 **状況** 以下のアイコンによって、データ・リスナーの現行状況が示されます。

1 **稼働中**

1 データ・リスナー・コンポーネントがアクティブであることを示します。エンタープライズ・サーチ・システムが開始されると、デー

スレッド数

特定のスレッドの状態でアクティブであるスレッドの数を示します (例えば、5 個のスレッドがデータをアクティブにフェッチしている、など)。

データ・リスナー・コンポーネントの停止と始動

データ・リスナー・コンポーネント用に構成されたポート番号を変更した場合、コンポーネントを停止して再始動する必要があります。

手順

データ・リスナー・コンポーネントを停止して再始動するには、以下のようになります。

1. 索引サーバーで、エンタープライズ・サーチ管理者としてログインします。このユーザー ID は、DB2 II OmniFind Edition のインストール中に指定されています。
2. ES_NODE_ROOT/master_config/datalistener ディレクトリーに移動します。
3. 以下のコマンドを入力して、データ・リスナーを停止して再始動します。

```
esadmin datalistener stop  
esadmin datalistener start
```

コレクション内の文書数の見積もり

コレクションを作成するときに、コレクションが保持する文書の予想数の見積もりを指定できます。DB2 II OmniFind Edition 内のリソース・マネージャーは この数値を使用して、コレクションに必要なメモリーとディスク・リソースを見積もります。

リソース・マネージャーは、メモリーとディスク・リソースの必要量の見積もりが現在システムで使用可能な量よりも大きい場合に警告を出します。この警告によって、後で「リソース不足」の問題が発生することを予防できます。

モニターは、文書の推定数と、アラートを受け取るために構成したしきい値のパーセンテージとを使用して、コレクションにより文書の最大数に近づきつつあることについての通知をいつ送信するかを決定します。

コレクションの見込みサイズの推定値を与えるには、コレクションを作成するときに、「**Estimated number of documents (文書の推定数)**」フィールドに数を入力します。デフォルト値は、100 万文書 (1000 000) です。

コレクションを作成したあと、コレクションを編集し、「一般」ページで新しい値を指定することで、この推定値を変更できます。

コレクションが増加してサイズが推定値に到達したとしても、システムは、索引への文書の追加を停止しません。しかし、コレクションのためのアラートを構成しており、索引内の文書数が一定限度を超えたときに通知するというオプションを有効にしていれば、コレクションのサイズが通知のために指定したパーセンテージに到達したときに、通知を受け取ります。

注: バージョン 8.2 では、このアラートを構成するとき、索引に含めることができる文書数を入力することで、索引内の文書数の限度を指定しました。バージョ

1 ン 8.2.1 では、「Estimated number of documents (文書の推定数)」フィールド
1 に指定した数が自動的に「限度」フィールドに表示され、通知のしきい値は、
1 索引内の文書数がこの限度の何パーセントになったときに通知するかを指定し
1 て構成します。

1 コレクション・ウィザードによるシステム・リソースの自動的なチェック

1 コレクション・ウィザードを使用すると、システムは、エンタープライズ・サー
1 チ・システムに新しいコレクションまたはクローラーを追加するのにシステム・リ
1 ソースが十分であるかどうかを自動的に見積もります。 DB2 II OmniFind Edition
1 バージョン 8.2 では、システム・リソースは、「システム・リソースのチェック」
1 ボタンをクリックしなければチェックできませんでした。

1 コレクションまたはクローラーを作成したあと、文書のクロールを開始する前にシ
1 ステム・リソースをチェックすると、DB2 II OmniFind Edition を、現在の構成設定
1 に基づく全キャパシティで実行するのにシステム・リソースが適しているかどう
1 か判断できます。

1 この機能に関する完全な情報は、DB2 II OmniFind Edition support Web サイト:
1 Checking DB2 Information Integrator OmniFind Edition system resources の技術情報
1 (reference number 1193761) を参照してください。

1 パーサー・アクティビティのモニター

1 コレクションをモニターしている間に、パーサー・アクティビティに関する詳細
1 情報を見ることができます。

1 DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、パーサーの処理の開始と停止はモ
1 ニターできましたが、詳細な状況情報を見たり、パーサーが解析した文書数の情報
1 を知ることはできませんでした。

1 コレクションのパーサーをモニターし、詳細な状況情報を見るには、次のようにし
1 ます。

- 1 1. エンタープライズ・サーチ管理コンソールで、モニターするコレクションの「モ
1 ニター」アイコンをクリックします。
- 1 2. 「解析」ページをクリックします。
- 1 3. パーサーの状況が「稼働中」であれば、「詳細」アイコンをクリックします。
- 1 4. 次のウィンドウを使用して、パーサー・アクティビティの詳細を表示します。
 - 1 • 『「Parser details (パーサーの詳細)」ページ』

1 「Parser details (パーサーの詳細)」ページ

1 「Parser details (パーサーの詳細)」ページを使用して、コレクションの解析された
1 文書に関する詳細な状況情報を表示します。 オプションによって、統計を調べた
1 り、パーサー・アクティビティを管理したりできます。

フィールドおよびコントロール

リフレッシュ

このページの情報をリフレッシュします。状況メッセージに、この情報が最後にいつリフレッシュされたかが示されます。

Parser status summary (パーサー状況サマリー)

この領域のオプションでは、パーサーの状況を示し、解析されたがまだ索引が作成されていない文書に関する統計情報を提供します。

状況 「状況」行の最初のアイコンによって、クローラーの現行状況が示されます。



稼働中

パーサーが稼働中であることを示します。

パーサーの実際の状態に応じて、現行の解析アクティビティに関する詳細のメッセージが表示される場合があります。例えば、パーサーがアクティブに文書を解析中である、アイドルである（解析可能な文書ができるまでスリープしている、エラー条件により再始動を待っている、またはパーサー・サービスの再始動を待っている）、または休止している（例えば、索引再編成の完了を待っている）、などがあります。



停止

パーサーが停止していることを示します。

パーサーの現行状況や管理役割に応じて、以下のアイコンによりパーサー・アクティビティを管理できます。



開始

パーサーを開始します。

パーサーは、開始されると通常、解析対象の文書がなくなるまで、クロールされた文書を解析します。その後、パーサーはスリープ・モードに入り、新たにクロールされた解析対象の文書があるかを次にチェックするまで実行されません。



停止

パーサーを停止します。

例えば、カテゴリー化タイプを変更したり、カテゴリー規則を追加したりした場合には、パーサーの停止と再始動が必要があります。

Number of documents in the data store that need to be indexed (データ・ストア内の索引作成が必要な文書数)

パーサーが解析してデータ・ストアに書き込んだ文書の数を示します。これらの文書は、まだエンタープライズ・サーチ索引に追加されていません。

コレクション内の各クローラーについて、以下の統計を入手できます。

Snapshot statistics (スナップショット統計)

この領域のオプションでは、パーサー・アクティビティの現行状況を示し、個々のクローラーによって収集された文書に関する統計情報を提供します。最適な検索結果を得るために、コレクション内のさまざまなクローラーによってクロールされた全文書をパーサーが解析するまで、索引を作成しないでください。

Snapshot start (スナップショット開始)

パーサーの状況の現行ビューにある統計が収集された日時を示します。

Parse rate (解析速度)

パーサーが解析している 1 秒当たりのページ数を示します。

コレクション内の各クローラーについて、以下の統計を入手できます。

クローラー名

コレクション内の各クローラーの名前を示します。

クローラー・タイプ

クローラーごとに、クローラーがクロールするデータのタイプを示します。

Documents parsed (解析された文書)

クローラーごとに、解析に使用できる文書数と、これまでに解析した数を示します。

状況 クローラーごとに、文書解析アクティビティの状況を示します。



稼働中

このクローラーがクロールした文書をパーサーがアクティブに解析中であることを示します。



停止

このクローラーの文書をパーサーが解析中でないことを示します (おそらく、解析に使用できる文書がないため)。



休止

このクローラーがクロールした文書の解析が休止していることを示します。



エラー

このクローラーがクロールした文書を解析中にエラーが発生したことを示します。エラーを確認するには、コレクションのモニター中に「ログ」ページを開き、パーサーのログ・ファイルを表示します。



完了

このクローラーがクロールした文書の解析をパーサーが完了したことを示します。

HTML メタデータの検索フィールドへのマッピング

パーサーは、HTML メタデータ・エレメントをフィールド名にマップできます。コレクションのパーサーを構成するときに、検索フィールドとしてどの HTML メタデータ・エレメントを索引付けするかを指定できます。そして、ユーザーは、照会の中でこれらのフィールド名を指定することによって、HTML 文書の特定の部分を検索できます。

HTML メタデータをフィールドにマップするときに、ユーザーがフィールドを検索できるか、パラメトリック照会でフィールドを検索できるか、あるいは検索結果の中でフィールドを見ることができるかを指定します。

HTML メタデータ・エレメントを検索フィールドにマップするには、次のようにします。

1. 管理コンソールで、変更するコレクションの「**編集**」アイコンをクリックします。
2. 「解析」ページを選択します。
3. 「**HTML メタデータをフィールドにマップ**」をクリックします。
4. 次のウィンドウを使用して、検索するメタデータ・フィールドに関する情報を指定します。
 - 『「HTML metadata field mappings (HTML メタデータ・フィールド・マッピング)」ページ』

「HTML metadata field mappings (HTML メタデータ・フィールド・マッピング)」ページ

「HTML metadata field mappings (HTML メタデータ・フィールド・マッピング)」ページを使用して、HTML メタデータ・エレメントをフィールド名にマップします。マップされたフィールド名を照会で指定することによって、HTML 文書の特定部分を検索し、より正確な検索結果を取得できます。

HTML フィールド・マッピングを作成した場合、パーサーを次に停止して再始動したときにその変更が有効になります。新しいマッピングは、すでに解析されて索引が作成されたデータには影響しません。

フィールドおよびコントロール

フィールドの追加

別の HTML メタデータ・エレメントを検索フィールド名にマップできるブランク行を追加します。

検索フィールド名にマップする HTML メタデータ・エレメントごとに、以下の情報を提供します。

フィールド名

HTML メタデータ・エレメントと関連付ける名前を入力します。このコレクション内の HTML 文書を照会するときに、このフィールド名を指定できます。例えば、publisher という HTML メタデータ・タグをマップする場合に、検索フィールド名として publisher を入力することができます。

この値は、英数字のみを含む単一ワードでなければなりません。

HTML メタデータ・フィールド

「フィールド名」フィールドで指定したフィールド名にマップする HTML メタデータ・エレメントの名前を入力します。同じ例を使用すると、HTML メタデータ・エレメント `publisher` を `publisher` という検索フィールドにマップするためには、このフィールドには `publisher` を入力します。

この値は、英数字のみを含む単一ワードでなければなりません。

フィールド名による検索

「フィールド名」フィールドに指定されたフィールド名を指定することによってユーザーが HTML 文書を検索できるようにする場合は、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合、ユーザーは、このコレクション内の HTML 文書を検索する際にフィールド名を指定できません。

パラメトリック検索

ユーザーがこのフィールドの検索時にパラメトリック照会を構築できるようにする場合、このチェック・ボックスを選択します。パラメトリック照会では、数値と日付値を評価できます。例えば、このフィールドの値が別の値より大きいか、小さいかを判断する場合があります。

このチェック・ボックスを選択する場合、HTML メタデータ・エレメントのデータ・タイプが `DECIMAL`、`DOUBLE`、`INTEGER`、`SHORT`、`TIME`、または `TIMESTAMP` であることを確認してください。

検索結果に表示

検索結果にこのフィールドを表示する場合、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合、このフィールドは検索結果に組み込まれません。



削除

選択した HTML メタデータ・フィールド・マッピングを削除します。

日本語および中国語の文書の空白文字からの改行文字の除去

空白文字が語の境界の区切りとして使用されない日本語や中国語といった言語では、行の分断を引き起こす特定の空白文字を除去するようにパーサーを構成できます。

コレクションのためにこの機能を使用可能にするには、次のようにします。

1. エンタープライズ・サーチ管理者としてログインします (このユーザー ID とパスワードは、DB2 II OmniFind Edition のインストールの間に構成されています)。
2. テキスト・エディターを使用して、ファイル `collection_ID.parserdriver/collection.properties` を編集します。ここで、`collection_ID` は、コレクションを作成したときにシステムがコレクションに割り当てた ID です。
3. `removeCjNewlineChars` プロパティの値を `false` から `true` に変更します。

この機能が使用可能な場合、指定されたコレクションの中の文書が日本語または中国語であれば、パーサーは、ASCII 文字以外の文字範囲からの 2 つの文字を分離す

る、改行またはタブ文字のどのような連続も除去します。タブ (0x09)、LF (改行、0x0A)、および CR (復帰、0x0D) 文字が除去されます。

コレクション・パーサーおよび Stellent セッションで処理する文書タイプの構成

DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、ファイル・タイプとコンテンツ・タイプは、特定のコレクション・パーサーと Stellent 文書フィルタリング・セッションに事前に割り当てられていました。バージョン 8.2.1 では、構成ファイルを作成して、特定のタイプの文書をどのように解析するかを指定できるようになりました。

バージョン 8.2 では、特定のタイプの文書が解析されませんでした (PostScript 文書など)。また、処理のために Stellent セッションに送信するため、ハードコーディングされるものもありました (Microsoft Word、Microsoft Excel、Microsoft PowerPoint、Lotus Freelance、Lotus 123、PDF、RT、および一太郎)。他のすべての文書フォーマットは、組み込みの HTML または XML パーサーで処理されました。メタデータを誤解してしまったため、プレーン・テキストと HTML 文書が間違っ て Stellent セッションに送信され、組み込みのパーサーの 1 つに戻される場合もあり得ました (パフォーマンスに影響を与える可能性のある状況です)。

バージョン 8.2.1 では、クローल・スペース内の文書が正確に、そして能率的に解析されるようにするために、構成ファイルを作成して、どのタイプの文書をコレクション・パーサーで解析するか、また、どれを Stellent セッションで解析するかを指定できるようになりました。

文書タイプをコレクション・パーサーと Stellent セッションに関連付けるタスクは次のとおりです。

1. コレクション・パーサーの文書タイプを構成します。このステップには、文書タイプをコレクションが使用するパーサーにマップするための、構成ファイルの作成が含まれます。コレクションごとにこれらの構成ファイルの 1 つを作成できます。
2. Stellent セッションの文書タイプを構成します。このステップには、文書タイプをコレクションが使用する Stellent 文書フィルターにマップするための、構成ファイルの作成が含まれます。コレクションごとにこれらの構成ファイルの 1 つを作成できます。
3. 変更を有効にするために、エンタープライズ・サーチ管理コンソールを使用して、文書タイプを構成したコレクションをモニターし、パーサーを停止して再始動します。

コレクション・パーサーの文書タイプの構成

特定のタイプの文書をコレクション・パーサーと関連付けるために、構成ファイルを作成します。エンタープライズ・サーチ管理コンソールには、この機能に対するサポートはありません。

構成ファイルで次のことを指定します。

- ファイル拡張子またはコンテンツに応じて、Stellent セッションに送信する文書
- メタデータが不完全なためにタイプが不明な文書の解析方法

1 構成ファイルが存在しなければ、コレクション・パーサーは、DB2 II OmniFind
1 Edition バージョン 8.2 とまったく同様の動作を指定した、デフォルトの構成設定を
1 使用します。これらのデフォルトの設定の説明は、29 ページの『デフォルトのパー
1 サー・サービス規則』を参照してください。

1 文書タイプをコレクション・パーサーに関連付けるには、次のようにします。

- 1 1. 索引サーバーで、エンタープライズ・サーチ管理者としてログインします。こ
1 のユーザー ID は、DB2 II OmniFind Edition のインストール中に指定されてい
1 ます。
- 1 2. 次のように構成ファイルを作成します。ここで、*collection_ID* は構成するコレ
1 クションの ID です。

1 ES_NODE_ROOT/master_config/*collection_ID*.parserdriver/parserTypes.cfg

1 このファイルは、Stellent セッションに送信するファイル拡張子とコンテンツ・
1 タイプをリストします。ファイルの形式は一連の行で、各行に次の規則の 1 つ
1 を指定します。

1 **EXTENSION** *extension parser*

1 URL が、指定された拡張子 (*extension*) で終わるすべての文書が、指定
1 されたパーサー (*parser*) で処理されます。拡張子の中にピリオドは含め
1 ないでください。照合は大/小文字を区別せずに行われます。

1 **CONTENTTYPE** *type/subtype parser*

1 コンテンツ・タイプが、指定されたタイプ/サブタイプ (*type/subtype*) と
1 一致するすべての文書が、指定されたパーサー (*parser*) で処理されま
1 す。文書のコンテンツ・タイプが *t/s* とすると、*t* がタイプと等しい場
1 合、あるいは、*s* がサブタイプと等しいかサブタイプがワイルドカード
1 (アスタリスク ***) の場合に一致します。

1 **UNKNOWN** *parser*

1 拡張子とコンテンツ・タイプが不明のすべての文書 (すなわち、クロー
1 ラーによって使用可能にされていない) は、指定されたパーサー (*parser*)
1 で処理されます。

1 **DEFAULT** *parser*

1 その他のどの規則でもカバーされないすべての文書は、指定されたパー
1 サー (*parser*) で処理されます。

1 すべての場合で、*parser* は、*html*、*xml*、*stellent*、または *none* でなければな
1 りません。ここで、*none* は、文書が解析されないことを意味します。

1 **規則の優先順位:** 複数の規則が文書に一致する場合、規則の現れる順番に関係な
1 く、より特定性の高い規則が有効になります。規則の特定性の順位は上記のリス
1 トの順番どおりで、下の方が低くなります。

- 1 • **EXTENSION** 規則は、**CONTENTTYPE** 規則よりも特定性が高くなります。
- 1 • **subtype** を含んだ **CONTENTTYPE** 規則は、ワイルドカードを含んだ
1 **CONTENTTYPE** 規則よりも特定性が高くなります。例えば、コンテンツ・タ
1 イプ *application/postscript* の規則は、*application/** の規則よりも優先順
1 位が上です。

- 同じ拡張子またはコンテンツ・タイプに対して 2 つの規則を作成すべきではありません。その場合は、どちらの規則の優先順位が高いかは、インプリメンテーション次第ということになります。

例

次の例では、組み込みの HTML パーサーが、拡張子が txt、htm、または html か、コンテンツ・タイプが text/ で始まるか、あるいは不明な拡張子とコンテンツ・タイプを持つような、すべての文書进行处理します。組み込みの XML パーサーは、拡張子が xml、またはコンテンツ・タイプが text/xml のすべての文書进行处理します。その他のすべての文書は、コンテンツ・タイプが application/ で始まるものを含め、Stellent セッションに送信されます。

```
EXTENSION doc stellent
EXTENSION txt htm
EXTENSION htm htm
EXTENSION html html
EXTENSION xml xml
EXTENSION ps none
CONTENTTYPE text/xml xml
CONTENTTYPE text/* html
CONTENTTYPE application/* stellent
UNKNOWN html
DEFAULT stellent
```

デフォルトのパーサー・サービス規則

ファイル・タイプとコンテンツ・タイプをコレクションのパーサーにマップする構成ファイルを作成していない場合、デフォルトの規則が文書の解析に使用されます。

コレクション・パーサーが使用するデフォルトの規則は次のとおりです。

```
EXTENSION pdf stellent
EXTENSION ppt stellent
EXTENSION prz stellent
EXTENSION lwp stellent
EXTENSION doc stellent
EXTENSION rtf stellent
EXTENSION xls stellent
EXTENSION 123 stellent
EXTENSION vsd stellent
EXTENSION vdx stellent
EXTENSION jxw stellent
EXTENSION jsw stellent
EXTENSION jtw stellent
EXTENSION jaw stellent
EXTENSION juw stellent
EXTENSION jbw stellent
EXTENSION jvw stellent
EXTENSION jfw stellent
EXTENSION jtt stellent
EXTENSION jtd stellent
EXTENSION jttd stellent
EXTENSION jttdc stellent
EXTENSION jttdx stellent
EXTENSION ps none
EXTENSION xml xml
EXTENSION txt text
EXTENSION htm htm
EXTENSION html html
EXTENSION shtml html
EXTENSION xhtml html
```

```
1 EXTENSION asp html
1
1 CONTENTTYPE application/postscript none
1 CONTENTTYPE application/* stellent
1 CONTENTTYPE text/rtf stellent
1 CONTENTTYPE text/richtext stellent
1 CONTENTTYPE text/xml xml
1 CONTENTTYPE text/html html
1 CONTENTTYPE text/plain text
1
1 UNKNOWN html
1 DEFAULT html
```

1 Stellent セッションの文書タイプの構成

1 どのタイプの文書が Stellent 文書フィルターで解析されるかを指定するために、構
1 成ファイルを作成します。エンタープライズ・サーチ管理コンソールには、この機
1 能に対するサポートはありません。

1 構成ファイルで次のことを指定します。

- 1 • Stellent セッションで解析するファイル・タイプ。ファイル・タイプは、Stellent
1 ライブラリーで認識されるファイル・タイプの 1 つと一致します。
- 1 • 組み込みのパースャーの 1 つで処理するためにコレクション・パースャーに送り返さ
1 れるファイル・タイプ。(メタデータを誤解してしまったためにコレクション・パ
1 ースャーが文書を間違って Stellent セッションに送信することもあるため、この処
1 置が必要です。)
- 1 • DB2 II OmniFind Edition でサポートされないために、リジェクトするファイル・
1 タイプ

1 構成ファイルが指定されても、それが存在しなければ、パースャーの開始は失敗しま
1 す。stellent.properties ファイル内の OutsideInSupportedTypes プロパティーに構成
1 ファイルの指定がなければ、デフォルトの構成設定が使用されます。これらのデフ
1 ゾルトの設定は DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 の動作と同じですが、こ
1 れについての説明は 32 ページの『Stellent セッションのデフォルトの構文解析規
1 則』を参照してください。

1 Stellent セッションの文書タイプを構成するには、次のようにします。

- 1 1. 索引サーバーで、エンタープライズ・サーチ管理者としてログインします。こ
1 のユーザー ID は、DB2 II OmniFind Edition のインストール中に指定されてい
1 ます。
- 1 2. ES_NODE_ROOT/master_config/collection_ID.stellent/stellent.properties フ
1 ァイルを編集します。ここで、collection_ID は、構成するコレクションの ID
1 です。
- 1 3. OutsideInSupportedTypes プロパティーに、作成している構成ファイルの絶対パス
1 を指定します。

1 例えば、単一のコレクションのために次の構成ファイルを作成し、コレクション
1 固有の他のファイルと一緒に保管します。

```
1 ES_NODE_ROOT/master_config/collection_ID.stellent/stellenttypes.cfg
```

1 すべてのコレクションに同じ設定を使用する場合、次の構成ファイルを作成
1 し、それを他のシステム・レベルのファイルと一緒に保管します。(この方法を

1 使用する場合、ステップ 2 (30 ページ) に示すように、このパスを各コレクション
1 の `stellent.properties` ファイルに必ず指定します。)

1 `ES_INSTALL_ROOT/default_config/stellent/stellenttypes.cfg`

1 4. 構成ファイルを作成します。このファイルに、文書タイプとその処理方法をリ
1 ストします。ファイルの形式は一連の行で、各行に次の規則の 1 つを指定しま
1 す。

```
1 accept DEFAULT
1 accept ALL doctype
1 accept type doctype
1 native DEFAULT
1 native type doctype
1 reject type
```

1 ここで、

1 *doctype*

1 doctype 照会トークンに使用される値。doctype トークンは、例えば、
1 照会で `doctype:pdf` と指定することで検索できます。

1 *type* Stellent ライブラリー内の `FI_` 値の 1 つ。*doctype* は、規則が当ては
1 まる場合に、doctype トークンに使用される値です。

1 **DEFAULT**

1 規則のタイプに応じて、受け入れられた (`accept`) かネイティブ (`native`)
1 のタイプのリストが、デフォルト・リストを含むということを意味しま
1 す。このオプションによって、デフォルト構成を置き換えるのではなく、
1 拡張できます。

1 **A11** 明示的にリストされていないタイプはすべて、指定された `doctype` トー
1 クンで受け入れられることを意味します。

1 **規則の処理:**

- 1 • *type* に対して `accept` 規則があれば (`accept DEFAULT` が指定された場合は、
1 デフォルト・リストも含めて)、受け入れられます。
- 1 • さもないければ、*type* に対して `reject` 規則があれば、受け入れられません。
- 1 • さもないければ、`accept ALL` が指定された場合、受け入れられます。
- 1 • そうでない場合は、受け入れられません。

1 文書タイプが受け入れられると、適用された規則に指定された *doctype* 値が使
1 用されます。この値が解析されたコンテンツと一緒にコレクション・パーサーに
1 送り返されます。文書タイプが受け入れられなければ、次の動作になります。

- 1 • *type* に対して `native` 規則があれば (`native DEFAULT` が指定された場合は、
1 デフォルト・リストも含めて)、文書は、この規則で指定された *doctype* トー
1 クンの値を示して、組み込みのパーサーに送り返されます。*doctype* の値は、
1 それぞれ、プレーン・テキスト、HTML、または XML を示す、`txt`、`htm`、ま
1 たは `xml` でなければなりません。
- 1 • そうでない場合は、文書はリジェクトされ、解析されません。

1 **例**

1 次の構成ファイルがあるとすると、Stellent セッションは、デフォルト・リストに加
1 えて、Microsoft Visio フォーマットを受け入れます。

```
1 accept DEFAULT
1 accept FI_VISIO3 visio
1 accept FI_VISIO4 visio
1 accept FI_VISIO5 visio
1 accept FI_VISIO6 visio
```

1 次の構成ファイルがあるとすると、Postscript 文書はサポートされ、文書タイプ ps
1 で検索可能です。 X ピクスマップ・フォーマット (XPM) は組み込みのテキス
1 ト・パーサーに送り返されます。 PNG イメージ・フォーマットはリジェクトされ
1 ます。そして、他のすべてのタイプは受け入れられ、文書タイプ other で検索可能
1 にされます。

```
1 accept DEFAULT
1 accept FI_POSTSCRIPT ps
1 native FI_XPIXMAP txt
1 accept ALL other
1 reject FI_PNG
```

1 Stellent セッションのデフォルトの構文解析規則

1 ファイル・タイプを Stellent セッション文書フィルターにマップする構成ファイル
1 を作成していない場合、デフォルトの規則が文書の解析に使用されます。

1 Stellent セッションが使用するデフォルトの規則は次のとおりです。

```
1 ACCEPT FI_WORD4 doc
1 ACCEPT FI_WORD5 doc
1 ACCEPT FI_RTF rtf
1 ACCEPT FI_WINWORD1 doc
1 ACCEPT FI_WINWORD1COMPLEX doc
1 ACCEPT FI_WINWORD2 doc
1 ACCEPT FI_WORD6 doc
1 ACCEPT FI_WINWORD6 doc
1 ACCEPT FI_ICHITAR03 jxw
1 ACCEPT FI_ICHITAR04 jsw
1 ACCEPT FI_WINWORD1J doc
1 ACCEPT FI_WINWORD5J doc
1 ACCEPT FI_RTFJ rtf
1 ACCEPT FI_WINWORD7 doc
1 ACCEPT FI_WORDPRO lwp
1 ACCEPT FI_WINWORD97 doc
1 ACCEPT FI_ICHITAR08 jtd
1 ACCEPT FI_WORDPRO97 lwp
1 ACCEPT FI_WINWORD2000 doc
1 ACCEPT FI_WINWORD2002 doc
1 ACCEPT FI_WINWORD2003 doc
1 ACCEPT FI_123R1 123
1 ACCEPT FI_123R2 123
1 ACCEPT FI_123R3 123
1 ACCEPT FI_EXCEL xls
1 ACCEPT FI_EXCEL3 xls
1 ACCEPT FI_EXCEL4 xls
1 ACCEPT FI_123R4 123
1 ACCEPT FI_EXCEL5 xls
1 ACCEPT FI_123R6 123
1 ACCEPT FI_EXCEL97 xls
1 ACCEPT FI_123R9 123
1 ACCEPT FI_EXCEL2000 xls
1 ACCEPT FI_EXCEL2002 xls
1 ACCEPT FI_EXCEL2003 xls
1 ACCEPT FI_FREELANCE prz
1 ACCEPT FI_POWERPOINT4 ppt
1 ACCEPT FI_POWERPOINT3 ppt
1 ACCEPT FI_POWERPOINT7 ppt
1 ACCEPT FI_FREELANCE3 prz
```


1	ACCEPT FI_POWERPOINTMAC3	ppt
1	ACCEPT FI_POWERPOINTMAC4	ppt
1	ACCEPT FI_PDF	pdf
1	ACCEPT FI_EXTPOWERPOINT4	ppt
1	ACCEPT FI_EXTPOWERPOINTMAC4	ppt
1	ACCEPT FI_POWERPOINTMACB3	ppt
1	ACCEPT FI_POWERPOINTMACB4	ppt
1	ACCEPT FI_POWERPOINT97	ppt
1	ACCEPT FI_PDFMACBIN	pdf
1	ACCEPT FI_POWERPOINT9597	ppt
1	ACCEPT FI_POWERPOINT2000	ppt
1	ACCEPT FI_POWERPOINT2	ppt
1		
1	NATIVE FI_HTML	htm
1	NATIVE FI_HTML_LATIN2	htm
1	NATIVE FI_HTML_JAPANESESJIS	htm
1	NATIVE FI_HTML_JAPANESEEUC	htm
1	NATIVE FI_HTML_CHINESEBIG5	htm
1	NATIVE FI_HTML_CHINESEEUC	htm
1	NATIVE FI_HTML_CHINESEGB	htm
1	NATIVE FI_HTML_KOREANHANGUL	htm
1	NATIVE FI_HTML_CYRILLIC1251	htm
1	NATIVE FI_HTML_CYRILLICKO18	htm
1	NATIVE FI_CYRILLIC1251	txt
1	NATIVE FI_CYRILLICKO18	txt
1	NATIVE FI_W2KHTML	htm
1	NATIVE FI_XL2KHTML	htm
1	NATIVE FI_PP2KHTML	htm
1	NATIVE FI_XML	xml
1	NATIVE FI_WML	xml
1	NATIVE FI_HTML_JAPANESEJIS	htm
1	NATIVE FI_WML_CHINESEBIG5	xml
1	NATIVE FI_WML_CHINESEEUC	xml
1	NATIVE FI_WML_CHINESEGB	xml
1	NATIVE FI_WML_CYRILLIC1251	xml
1	NATIVE FI_WML_CYRILLICKO18	xml
1	NATIVE FI_WML_JAPANESEJIS	xml
1	NATIVE FI_WML_JAPANESESJIS	xml
1	NATIVE FI_WML_JAPANESEEUC	xml
1	NATIVE FI_WML_KOREANHANGUL	xml
1	NATIVE FI_WML_LATIN2	xml
1	NATIVE FI_HTMLUNICODE	htm
1	NATIVE FI_XML_DOCTYPE_HTML	htm
1	NATIVE FI_XHTML	htm
1	NATIVE FI_ASCII	txt
1	NATIVE FI_ANSI	txt
1	NATIVE FI_UNICODE	txt
1	NATIVE FI_ASCII8	txt
1	NATIVE FI_ANSI8	txt
1	NATIVE FI_MAC	txt
1	NATIVE FI_MAC8	txt
1	NATIVE FI_SHIFTJIS	txt
1	NATIVE FI_CHINESEGB	txt
1	NATIVE FI_HANGEUL	txt
1	NATIVE FI_CHINESEBIG5	txt
1	NATIVE FI_LATIN2	txt
1	NATIVE FI_JAPANESE_EUC	txt
1	NATIVE FI_HEBREW_OLDPCODE	txt
1	NATIVE FI_HEBREW_PC8	txt
1	NATIVE FI_HEBREW_E0	txt
1	NATIVE FI_HEBREW_WINDOWS	txt
1	NATIVE FI_ARABIC_710	txt
1	NATIVE FI_ARABIC_720	txt
1	NATIVE FI_ARABIC_WINDOWS	txt
1	NATIVE FI_7BITTEXT	txt
1	NATIVE FI_JAPANESE_JIS	txt
1	NATIVE FI_CENTRALEU_1250	txt

```

1 NATIVE FI_UTF8 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_37 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_273 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_277 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_278 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_280 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_284 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_285 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_297 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_500 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_870 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_871 txt
1 NATIVE FI_EBCDIC_1026 txt

```

1 照会処理の強化

1 マルチサーバー構成の場合、フェイルオーバー保護は、単にサーバー・レベルでは
1 なく、コレクション・レベルで使用可能です。1つの検索サーバー上のコレクション
1 が何らかの理由で使用不可になると、そのコレクションの照会は、他の検索サ
1 ーバーに自動的に回されます。

1 同じ Web サイトからの結果の縮小表示

1 同じ Web サイトからの検索結果の縮小表示のオプションを指定するために
1 SiteDefs.txt ファイルを編集するとき、URL 接頭部と一緒に、サイト ID のス
1 トリングを指定できます。

1 DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 では、SiteDefs.txt ファイルには URL
1 接頭部のリストしか含めることができませんでした。バージョン 8.2.1 では、各サ
1 イトの ID としてストリングを指定できるようになりました。次の例に示すよう
1 に、行の先頭に URL 接頭部を入力し、オプションで、その右側にストリング ID
1 を入力します。

```

1 http://mycompany.server1.com/hr/ hr
1 http://mycompany.server2.com/hr/ hr
1 http://mycompany.server3.com/hr/ hr
1 http://mycompany.server1.com/finance/ finance
1 http://mycompany.server1.com/news news
1 http://mycompany.server1.com/USA

```

1 検索アプリケーションは、検索結果における文書の縮小表示またはグループ化で、
1 URL 接頭部または ID のどちらかを使用できます。例えば、hr という ID で、人
1 的資源 (human resource) の文書をホストする 3 つのサーバーからの検索結果を一
1 つに縮小表示できるようになります。

1 この機能をサポートするように、エンタープライズ・サーチの照会の構文が拡張さ
1 れました。例えば、同じグループに属す文書を取得するには、次の構文を使用しま
1 す。ここで、group は、そのグループに属す文書に対するグループ ID か完全修飾
1 URL です。

```
1 samegroupas:group
```

1 例:

```
1 samegroupas:hr
1 samegroupas:http://mycompany.server3.com/hr/

```

1 SiteDefs.txt ファイルの更新に関する完全な情報は、「エンタープライズ・サーチ
1 の管理」の中の「同じ Web サイトからの結果の縮小表示」のトピックを参照してく
1 ださい。

1 検索結果の拡張強調表示

1 QUERY インターフェースのプロパティによって、検索結果詳細のいくつかの領
1 域で、照会用語を強調表示できます。DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2 で
1 は、強調表示はサマリー・フィールドに限られていました。

1 検索アプリケーションを作成するときに、照会インターフェースの `getProperty` と
1 `setProperty` メソッドを使用することによって、照会処理を操作できます。これら
1 のメソッドで使用できる新しいプロパティ `HighlightingMode` によって、検索結
1 果の中の照会用語をどのように強調表示するかを制御できます。このプロパティ
1 は、次の値を持ちます。

1 **DefaultHighlighting**

1 サマリー・フィールドの照会用語のみ強調表示します。検索アプリケーションが
1 `HighlightingMode` プロパティを省略した場合、これがデフォルトのアクショ
1 ンです。

1 **ExtendedHighlighting**

1 照会用語の強調表示を、タイトル、URL、その他のフィールドといった、検索結
1 果の他の領域まで拡張します。

1 `getProperty` または `getProperties` メソッドを使用することによって、結果オブジ
1 ェクトのプロパティから、強調表示された URL フィールドを取得できます。プ
1 ロパティ名は `HighlightedDocumentID` で、その値は強調表示された URL で
1 す。Result メソッド `getDocumentID` は、引き続き、強調表示されなかった URL
1 を戻します。

1 検索アプリケーションのタイムアウト・サポート

1 リモート・アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) の プロパ
1 ティを使って、リモート要求のタイムアウト値を指定できます。

1 検索アプリケーションは、次のメソッドで `Properties` オブジェクトを使って、タ
1 イムアウト・プロパティを渡すことができます。

```
1 SearchFactory.getSearchService(Properties)  
1 BrowseFactory.getBrowseService(Properties)
```

1 例:

```
1 // create a new Properties object.  
1 Properties config = new Properties();  
1 config.setProperty("hostname", hostname);  
1 config.setProperty("port", portNumber);  
1 config.setProperty("locale", "en_US");  
1 config.setProperty("timeout", "60");  
1 SearchService searchService = factory.getSearchService(config);
```

1 タイムアウト値 (リモート要求がタイムアウトになるまでの秒数) は、整数でなけれ
1 ばなりません (60 といった整数。60.5 や sixty などとは指定できません)。タイム
1 アウト値を指定しなければ、リモート API はデフォルト値の 30 秒を使用します。

既知の制限、問題、および予備手段

ここでは、DB2 Information Integrator OmniFind Edition バージョン 8.2 に関する既知の制限、問題、および予備手段について説明します。

制限および制約事項は、他のリリースには該当しない場合があります。

DB2 UDB for AIX tar ファイルのアンパック

DB2 Universal Database Enterprise Server Edition バージョン 8.2 for AIX の場合、DB2 UDB をインストールするには、その前に、CD イメージを `untar` する必要があります。

エンタープライズ・サーチ・インストールを開始する前に、CD をアンパックします。

CD のアンパックの詳細は、「DB2 インフォメーション・センター」(バージョン 8.2) <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/index.jsp> を参照してください。

「DB2 インフォメーション・センター」の中で、「インストール」 → 「データベース・システム」 → 「DB2 Universal Database for Linux, UNIX, および Windows」 → 「DB2 サーバー」 → 「DB2 UDB Enterprise Server Edition (非パーティション)」 → 「AIX」 → 「DB2 セットアップ・ウィザードの開始」をクリックします。

このファイルは、エンタープライズ・サーチ・インストール・プログラムで DB2 UDB をインストールする前に、`untar` する必要があります。

CD イメージを `untar` するには、次のようにします。

1. `product.tar.Z` を一時ファイル・システムにコピーします。ここで、`product` は、インストールする、ライセンス交付を受けた製品を表します。
2. 次のコマンドを入力して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。

```
zcat product.tar.Z | tar -xf - ;./product/db2setup
```

例えば、DB2 UDB Enterprise Server Edition のプロダクト名が `ese` であれば、次のコマンドを入力します。

```
zcat ese.tar.Z | tar -xf - ;./ese/db2setup
```

エンタープライズ・サーチのインストールの間に、ファイル `db2setup` が入った、`untar` されたファイル・パスの中のディレクトリーを指定します。例えば、`untar` されたファイルのディレクトリーとして、`./ese.sbcsaix1` を指定します。

AIX での共用メモリー・セグメント

AIX において、メッセージ `SQL1224N` が発行された場合は、AIX で許される共用メモリー・セグメントの数が超過した可能性があります。

この問題を解決するには、IBM Support Web サイトの「SQL1224N Shared Memory Segments」のトピックを参照してください。

Windows 上でアンインストールしたあと、システムを再始動する

Windows コンピューター上で DB2 II OmniFind Edition をアンインストールした場合、すべてのプログラム・ファイルの除去を完了させるために、システムを再始動する必要があります。

また、エンタープライズ・サーチのインストール・ディレクトリーは、手動で削除する必要があります。システムの再始動や、プログラム・ファイルの削除を行わずに、再度エンタープライズ・サーチをインストールしようとする、問題が発生する場合があります。

Linux および AIX の場合の孤立 URLFetcher プロセス

問題: Web クローラーが 2 つのプロセスを使用します。1 つのプロセスが終了したときに、そのプロセスは 2 番目のプロセスを終了するためのシグナルを出します。時には、1 つのプロセスが突然終了し、もう一方のプロセスが取り残されて、いつまでも実行を続ける場合があります。

次に示す UNIX ps コマンドの出力に、次のプロセスのような孤立プロセスがあると、これが発生していることが分かります。

```
F S UID          PID PPID  C PRI  NI ADDR      SZ WCHAN  STIME TTY          TIME CMD
0 S user1      26222    1  0  75   0   - 152641 schedu 10:34 pts/8      00:00:00
```

```
/opt/IBMJava2-141/jre/bin/java -classpath ../../URLFetcher.jar:...
```

次の点に注目してください。

- PPID (親プロセス ID) が 1 となっているのは、そのプロセスが孤立していたことを示します。
- classpath の中に URLFetcher.jar があれば、これが Web クローラー・プロセスであることを示します。

解決策

孤立プロセスのプロセス ID (PID) を見つけます。前の例では 26222 です。これを強制終了します。Linux および AIX では、kill コマンドを引数を付けずに使用します。プロセス表に、「子」項目があるかもしれません。子項目は、孤立プロセスによって作成されたスレッドを示しています。これらの子項目は、上位のプロセスを強制終了するときに、削除する必要があります。

孤立 URLFetcher プロセスがあれば、そのプロセスを強制終了してください。これは、そのようなプロセスがプロセス表にあると、オペレーティング・システムがそのためにリソースを予約するためです。これらの孤立プロセスがないかどうか、定期的に検査する必要があります。特に、Web クローラー異常終了したと考えられる場合は、検査が必要です。そのようなプロセスが存在した場合は、強制終了してください。

注: DB2 II OmniFind Edition バージョン 8.2.1 では、URLFetcher は、C++ コンポーネントが終了したことを認識すると自分で終了するようになったため、孤立プロセスはめったに起こりません。実際に問題が発生した場合は、別のユーザーの httpauth.ini の編集セッションを間違っって強制終了しないように注意します (HTTPAuthEdit ユーティリティーは URLFetcher JAR ファイルから実行している JVM で、処理プログラム・テーブルの中では似たように見えるかもしれませんが)。

サーバー上の索引の場所

コレクションを作成するときに、索引の場所としてデフォルトの場所以外を指定し、それがサーバーのデータのルート・ディレクトリー上ではない場合、この索引の場所のディスク・スペース使用量はモニターされません。

マルチサーバー・インストールの場合、コレクションを作成するときに、索引の場所としてデフォルトの場所以外を指定したければ、最初に、4 つのすべてのサーバー上に索引の場所が存在しなければなりません。

ヒープ・サイズの限度

文書パーサー Java™ セッション (parserservice と呼ばれます) は、400 MB のヒープ・サイズを限度としています。

ヒープ・サイズ値は、次のように保管されます。

```
ES_NODE_ROOT/config/services.ini:session7.max_heap=400
```

parserservice セッションについてのシステム・エラー・ログに OutOfMemory メッセージが表示された場合、parserservice セッションを停止して、parserservice の services.ini ファイルの中の max_heap の値を増やし、parserservice セッションを再開します。

ラージ・オブジェクトの入った DB2 UDB 表

128 MB 以上の LOB データを含んだ DB2 Universal Database 表は、クロールできません。8 MB を超える文書は索引付けできません。

索引状況が表示されない

前のインストールを除去せずに、DB2 II OmniFind Edition の新規バージョンを再インストールすると、索引モニター状況が正しく表示されないことがあります。

索引作成を開始したとき、管理コンソール上の「索引」ページに、索引作成の状況が正しく表示されません。しかし、索引作成は進行しており、作成が終了すると、「索引」ページに、索引付けされた文書数と、索引作成の時間が正しく表示されます。

DB2 II OmniFind Edition の新規バージョンをインストールする前に、前のバージョンは除去することをお勧めします。

Linux および AIX の場合のユーザー ID 許可

新規のエンタープライズ・サーチ・ユーザー ID に、書き込み許可を追加する必要がある場合があります。

エンタープライズ・サーチ管理者からの別の Linux または AIX ユーザーで DB2 II OmniFind Edition を再インストールした場合、DB2 クローラーを追加し、リモートまたはアンカカタログ・データベースのクロールを指定すると (これは DB2 Universal Database Type 4 Java Database Connectivity (JDBC) ドライバーを使用します)、エラーが発生することがあります。この場合、新規エンタープライズ・サーチ管理者ユーザーの書き込み許可を `/home/db2inst1/sqllib/tmp/0.spf` ファイルに追加する必要があります。

1 FileNet Content Services の直接の文書アクセスを使用可能にする

1 VeniceBridge クローラーを使用して、DB2 Information Integrator Content Edition (以
1 前は VeniceBridge) サーバーによって管理されている FileNet Content Services リポ
1 ジトリをクロールするとき、ターゲット FileNet Content Services ライブラリー
1 と FileNet Web Services は FileNet Content Services コネクタと連動し、直接文
1 書アクセスを使用するように構成されている必要があります。直接の文書アクセス
1 のサポートを セットアップするには、「FileNet Web Services Administrator's
1 Guide」および FileNet Content Services 管理の資料を参照してください。

1 クロール・ニックネーム表の制限

1 IBM DB2 Universal Database for z/OS® および Microsoft SQL Server の IBM DB2
1 Information Integrator ニックネーム表のクロールには制限があります。

1 ターゲット表が DB2 Universal Database for z/OS または Microsoft SQL Server の
1 DB2 Information Integrator ニックネーム表で、文書コンテンツ・フィールドが指定
1 されている場合、固有 ID は次のデータ・タイプの列を含むことができません。

- 1 • LONG VARCHAR
- 1 • LONG VARCHAR FOR BIT DATA
- 1 • LONG VARGRAPHIC

1 ターゲット表が Microsoft SQL Server の DB2 Information Integrator ニックネーム
1 表で、ニックネーム表が UTF-8 コード・セットのデータベースに作成されている
1 場合、BLOB データ・タイプの列からの文書コンテンツは破壊される可能性があります。
1

1 ターゲット表が DB2 Universal Database for z/OS または Microsoft SQL Server の
1 DB2 Information Integrator ニックネーム表で、文書コンテンツ・フィールドが指定
1 されていれば、次のステップに従って DB2 クローラーのパフォーマンスを改善し
1 てください。

- 1 1. COLLATING_SEQUENCE オプションを Y に設定してサーバーを作成します。
- 1 2. このサーバーの下にニックネームを作成します。

1 オプションを Y に設定する前にすでにニックネーム表が定義されている場合は、ニ
1 ックネームを除去し、再度作成してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、米国以外の国においては本書で述べる製品、サービス、またはプログラムを提供しない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、製造元によって明示的に指定されたものを除き、他社の製品、プログラムまたはサービスを使用した場合の評価と検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）の間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほめかしたり、保証することはできません。お客様は、IBM のアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠し

たアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

Outside In (®) Viewer Technology, ©1992-2004 Stellent, Chicago, IL., Inc. All Rights Reserved.

IBM XSLT Processor Licensed Materials - Property of IBM ©Copyright IBM Corp., 1999-2004. All Rights Reserved.

商標

ここでは、IBM の商標と、特定の IBM 以外の商標をリストします。

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
AIX
AIX 5L
DB2
DB2 Universal Database
Domino
Informix
Lotus
Lotus Notes
Notes
OmniFind
WebSphere
xSeries
z/OS

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Intel、Intel Inside (ロゴ)、MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

IBM と連絡を取る

お客様の国または地域で IBM に連絡する方法については、Web の www.ibm.com/planetwide にある「IBM Directory of Worldwide Contacts」にアクセスしてください。

製品情報

DB2 Information Integrator に関する情報は、Web により入手できます。

Web の www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html にアクセスしてください。

1. 製品の注文または一般情報の入手: 1-800-IBM-CALL (1-800-426-2255)
2. 資料の注文: 1-800-879-2755
3. Web の www.ibm.com/software/data/integration/db2ii/support.html にアクセスしてください。

このサイトには、次の最新情報が入っています。

- 技術ライブラリー
- 資料の注文方法
- 製品のダウンロード
- ニュースグループ
- フィックスパック
- ニュース
- Web リソースへのリンク



Printed in Japan

